

が一体どれくらいあるかは分からないが、毎日毎秒増えていることは間違いないであろう。その特效薬は恐らくないが、旅を1つの選択肢として試したらどうかと薦めたい。短期間でもいいから、大自然の懐の中で、美と醜、善と悪、生と死、愛と憎、恒久と瞬間、真実と幻想、古代と現代、現在と将来などなど、もう一度吟味してみよう。大自然に対座し、一人ぼっちで「感触」し、感動し、感慨し、感激し、さらに感泣してみよう。

甘肅新聞網 (<http://www.gs.chinanews.com.cn/news/2006-10-25/1/49484.html>)

「都市晨报」10月20日 (http://www.tynews.com.cn/shehuifazhi/2006-10/20/content_2662770.htm)

英国の方言 リヴァプール編

経営学部
安藤 聡

リヴァプール方言のことを「スカウス」(Scouse)という。スカウスとは元来は、リヴァプール界隈で昔から食されている鍋料理のことである。ジャガイモとタマネギとニンジンと牛肉あるいは羊肉、さもなくばコーンビーフを煮込んだもので、アイルランドのアイリッシュ・シチューと似ているが、いずれも貧しい労働者の日常的なメニューである。その「スカウス」が転じてリヴァプール市民を指すようになり(『OED』に掲載されているこの用例のもっとも古いものは一九四五年)、さらに転じてリヴァプール方言を意味するようになったのだ。『OED』には一九六三年六月三日付けの『ガーディアン』の記事がこの意味でのもっとも古い用例として引用されているが、この記事の内

容は次のようなものである。「このロックグループはリヴァプールを一夜にしてエンターテインメント界で注目される場所に変えてしまった。このグループの二枚のレコードが発売されてから、ロンドンの業界人にとってはスカウスの単語をいくつか覚えておくことが不可欠になった」。『OED』にはこの部分しか引用されていないので詳しい文脈は不明だが、「このロックグループ」というのは多分ビートルズのことであろう。なお、現在では「リヴァプール市民」のことは「スカウス」というよりも「リヴァパドリアン」(Liverpudlians)、あるいはそれを略して「パドリアン」という方が普通である。これは 'Liverpool' の 'pool' の部分をわざわざ 'pudle' に変えて、さらに人を表す接尾辞 'ian' を付けて出来た俗語だ。英語で 'pool' といえば「水たまり」や「小さな池」を指すが、リヴァプールの街は混沌としているので 'pudle' (泥沼)の方が似つかわしい、ということで部外者が嘲笑的に、あるいは関係者が自虐的に名付けたのであろう。

リヴァプールはマーズイー川の河口に位置する港町である。十八世紀以降とくに米国との貿易で栄えたが、そのため一九五〇年代から六〇年代にかけては、米国文化の入口としての機能を持っていた。初期のビートルズは米国の黒人音楽(とりわけリズム・アンド・ブルーズなど)の影響を濃厚に受けていたが、これは彼らがリヴァプールで生まれ育ち、また一時期をドイツの同様な機能を持つ港町ハンブルクで過ごしたと密接に関連している。またリヴァプールはアイリッシュ海を挟んでアイルランドと向かい合っているが、このこともこの街の歴史を考える上で極めて重要である。十九世紀にはアイルランドから大量の人口流入があり、現在でもアイルランド系の住民(すなわちカトリック教徒)が多い。ビートルズの四人のうち三人までがアイルランド系であり、それ故に彼らが書く詩にはアイルランド的な機知とユーモアが散見される。

このような歴史的経緯から、スカウスすなわちリヴァプール方言はアイルランド英語と米語の影

響を受けて、さらに人口急増期に他の英国の方言とも混ざり合い、十九世紀後半頃にその特徴的な部分が確立したと言われる。スカウスの特徴として一般に指摘されているのは、独特の鼻にかかったような発音と発話の途中や末尾で唐突に上昇するイントネーションである。個別の音素ごとの特徴としては、まず語尾の 'y' を強く発音することが挙げられる。たとえば 'cloudy' や 'rainy' などの語尾の「イー」が第一強勢の母音と同じくらいの強さで発音される。これは近隣の他の方言にはまったく見られない特徴である。

次にアイルランド方言の影響として、子音 'th' が有声音の場合は 'd'、無声音の場合は 't' に近くなる、ということが指摘できる。これはつまり 'th' を発音する際に舌の先端を十分に上下の前歯の間に入れられないということである。これは日本人の英語にもときどき見られる特徴である。いっぽうで 't' の子音は語尾では「チ」と発音され(たとえば 'night' は「ナイチ」、'front' は「フロンチ」になる)、語中では 'r' の子音で代用される。後者は米語にも見られる特徴であり、たとえば 'letter' は「レラー」、'water' は「ウォラー」になる。だからビートルズは 'Let It Be' のサビを「レリッピー、レリッピー」と歌っているのである。さらに語頭の 'y' や 'd' には 's' に近い子音が混ざり、たとえば 'drink' は [dsrink] (カタカナで敢えて表記すれば「ヅリンク」になるのか)、'toy' は [tsoy] (同じく「ツォイ」というような発音になる。また、ロンドンのコックニーや英国各地の方言と共通する特徴として、語頭の子音 'h' の脱落が指摘できる。またイングランド北部の方言の多くに見られる特徴として、'but' や 'come' などの母音「ア」が「ウ」になることがあり、リヴァプールでもたとえば 'bus' は「ブス」と発音される。

リヴァプール英語の特徴は発音ばかりではない。この地方に特有の語彙や表現は枚挙に暇がないが、全体的に言えることは貧しい生活から生まれた表現、権威に対する反発を示す表現、長い語を略した語尾の「イー」などが多く見られることである。また、性行為や飲酒に関連する語彙が異常に豊富

なもの特徴のひとつであろう。

貧しい生活から生まれた表現としては、たとえば 'blind scouse' を挙げる事が出来る。これはいわゆる鍋料理としての「スカウス」の、肉を入れないものである。もちろん、ヴェジタリアン向けのスカウスということではない。スカウスに入れる牛肉や羊肉は安い細切れ肉であるが、それさえも買うことが出来ない人たちが仕方なく食するのがこの「ブラインド・スカウス」なのだ。(尤も敬虔なカトリック教徒であるパドリアンたちは、たとえ金があっても金曜日にはブラインド・スカウスを食べるのであろうが。) また同様な例としてマーガリンとマスタードを塗ったパンを二枚重ねたものの謂いで 'mock ham sandwich' (偽ハムサンド) というのがある。一方で「代金」や「価格」を意味する 'damage' もこの種の語彙のひとつであろう。買い物をするときに支払う金額はそれだけの「損害」あるいは「痛手」なのである。また「着飾った状態」を表す 'dressed up' がこの地の方言では 'costy' 「高い」と表現されるのも面白い。権威に対する反発が現れている最も特徴的な語として、「警察官」を意味する 'filth' が挙げられよう。この単語の通常の意味は「汚物」、「ゴミ」、「墮落」だ。

性に関する語彙が多いことは方言や特定の世代間の俗語の多くに共有される特徴だが、スカウスにおいてはその数が普通でない。代表的なものをアルファベット順に紹介して行こう。'anytime Annie' 「いつでもアニー」というのは「売春婦」のことであるが、何故「アニー」なのかは不明。有名な伝説的娼婦がリヴァプールにいて、それがアニーという名前だったのかも知れないし単に「エニー」との語呂合わせかも知れない。動詞で 'bag off' は「性交のために密会すること」、'berd-watcher' は「女に色目を使う男」だが、当然 'bird-watcher' に引っかけた洒落で、'berd' はイングランド北部やスコットランド方言で「少女」あるいは「淑女」を意味する ('burd' とも綴る)。「女性器」を 'box' と称するのは米国伝来であろう。また「性行為を途中でやめる」ことを 'get off at Edge Hill' 「エッジ・ヒルで降りる」と表現する。

エッジ・ヒルはリヴァプールのターミナル駅であるライム・ストリートの手前にある駅だ。英語で 'House of Commons' と言えば普通は「下院」だが、リヴァプールでは「売春婦の性器」をも意味する。「ランチタイムに性行為を行う」ことは 'do a matinee' である (matinee は芝居などの「昼の部の上演」)。他にも性関連の語彙は枚挙に暇がないが、とてもここには書けないようなものばかりなのでこれくらいにしておきたい。

飲酒関連の語句が異常に多いのは、やはりアイルランド系住民が多いからであろう。何しろ、アイルランドと言えばスタウト (stout: 黒ビール。一番有名なのはギネス) である。飲酒に関するリヴァプールの語彙をアルファベット順に紹介すると、まずは「いつまでも飲み続けること」を意味する 'bender' というのがある。次に「酔っぱらった」という意味の 'bevved' というのがあるが、これは次の段落で紹介する 'bevvy' を動詞に転用し、その過去分詞形を形容詞として使っているのである。また 'blitzed' も「泥酔した」という意味の分詞形容詞だが、元来の意味はもちろん「空襲を受けた」である。同じく泥酔した状態を表す 'chemicked'、'kaylied' という分詞形容詞もある。さらにどうしようもなく酔っぱらった状態を表すのは 'lushed' である。一方でほろ酔いの状態を表す形容詞として 'merry' がある。他にもひどく酔った状態を表す形容詞として 'palatick' と 'rotten' もあるが、前者は「ワインの識別力」を意味する 'palate' と関係があるのかわからないか不明、後者は「腐った」、「異臭を放つ」が元来の意味である。また「酔いつつある状態」を表す 'well away' は「(通常の状態から)十分に離れた状態」が原義だろうか。「難破した」という意味の 'wrecked' もまた「酔っぱらった」という意味で使われる。これだけ多くの語句があるということは、リヴァプールにはそれだけ泥酔者が多いということを如実に表していると言える。

語尾の「イー」を強く発音することがこの地方の英語の特徴の一つであることにはすでに触れた。一方で長い単語の後半を「イー」に置き換えることは全国的に見られる特徴だが (たとえば

'football' を 'footy'、'chocolate' を 'chocky' とするような例。主に幼児語だが、大人も使わなくはない)、リヴァプールにはこのようにして成立した俗語が非常に多い。たとえば「飲み物」、とくに「ビール」を意味する 'bevvy' (beverage)、「フィッシュ・アンド・チップス店」'chippy'、「煙草」'ciggie' (cigarette)、「便所」'lavvy' (lavatory)、「牛乳配達人」'milkie' (milk man)、「携帯電話」'mobie' (mobile phone)、「家賃集金人」'rennie' (rent collector)、「ズボン吊り」'sussies' (suspenders) などである。ほかに語源がよくわからないものとして「ゴミ収集人」'binnie' ('dust bin' の 'bin' か?)、「サンドウィッチ」'butty' ('butter' と関係があるのか?)、「電気屋」'lecky' ('electricity' の 'lec' の部分か?)、「病院」'ozzy' ('hospital' の 'os' か?) などがある。このうちのいくつか、たとえば「チップー」や「スイギー」などは他の地方でも普通に使われる。

スカウスに関してひとつ気になることがある。それは、鼻に関する語(句)が妙に多いことである。リヴァプール方言が鼻にかかった発音になることと何か関係があるのだろうか? 「鼻」を意味する単語には、'bewdle'、'boodle'、'bugle' などがあり、また 'goobie' は「鼻をほじること」、'nuck nose' は「硝子窓に押し当てられて平たくつぶれた鼻」である。一方で、「鼻の上の自転車」'bike on the nose' は「眼鏡」である。'Ee's gorra bike onniz nose.' と言えば、「あの男は眼鏡をかけている」(He's got a bike on his nose.) という意味だ。

この最後の例のように、スカウスにはちょっとした言い回しに独特のユーモアを込めたものが散見される。例えば「牛乳」を 'cow juice' と表現したり、背が高い人のことを 'cud wind de Liver clock' (could wind the Liver clock: リヴァー・クロックのネジを巻くことができる) と言ったりする。リヴァー・クロックというのはリヴァプールのランドマーク的建築物「リヴァー・ビルディング」の時計台であり、この時計に手が届くほど背が高い、ということだ。また「高架鉄道」を 'docker's umbrella' 「港湾労働者の傘」と呼ぶ。

「人工中絶を行う診療所」を意味する 'Irish takeaway' には少しばかり説明が必要であろう。まず、英国には「お持ち帰り専門の中華料理店」'Chinese takeaway' というのがある。同様に 'Indian takeaway' というのもよく見かける。ちなみに、「お持ち帰り」を「テイクアウト」と言うのは米語であり、英語では「テイクアウェイ」だ。それで、「アイルランド料理のお持ち帰り専門店」というのは原則として存在しない。一方で、アイルランドは敬虔なカトリック国であるゆえ、人工中絶は禁止されている。そこで、望まない妊娠をしてしまったアイルランドの女性は、密かに海を渡ってリヴァプールへ中絶手術を受けに行くのであり、そこから生まれた表現が Irish takeaway なのである。一方で「新聞紙」を 'linen' と言うのも面白い。また 'louse ladders' 「シラミの梯子」というのはモミアゲのことである。さらに 'two bagger' 「袋二枚の人」というのがあり、これは「人並み外れたブス」を意味する。とても見るに耐えない顔なので紙袋を被せておかなければならず、しかもその紙袋が落ちてしまった場合のためにも一枚被せておかなければならない、ということなのである。それから、「喉が渇いている状態」を表すのに、'as dry as a witch's tit' などと言う。この 'tit' は「乳首」だが、「魔女の乳首」とは一体どのようなものか。確かに『ナルニア国物語』に登場する魔女はそれなりに美女ばかりだが、一般的に魔女は不気味な老婆ということになっている。それで、年老いた魔女の乳首というのは干乾びたものの喩えなのであろうか。このイディオムは飲酒関連の方に分類するべきかもしれない。

リヴァプールにはイングランド国教会とカトリック教会と、二つの大聖堂がある。このうちカトリックの大聖堂は英国の大聖堂とは思えないような超近代的なものだが、これのことを 'Paddy's Wigwam' 「パディのテント小屋」と言う。Paddy とはアイルランドによくある名前 (Patrick の愛称) で、アイルランド人一般を指す呼称としても使われる。カトリック教徒の大部分はアイルランドからの移民であるため、この大聖堂は「パディ

のテント小屋」と呼ばれるのだ。この大聖堂には他にも、'launching pad' (ミサイル発射台のことで、その建物の形からの連想だが、同時に 'pad' を 'Paddy' に掛けている) とか 'Mersey Funnel' (マーズイー川の漏斗。これも形態からの発想) とも呼ばれる。パディ関連ではもうひとつ、グレイト・ホウマー・ストリートの中古品市を 'Paddy's market' という。

他にもリヴァプールの表現として、'o'clock' を 'bells' というのがある。「七時に会いましょう」は 'See you at seven bells.' になる。また「素晴らしい！」という意味の感嘆詞 'boss!' や、フットボールのゴールキーパーを 'cat' というのもリヴァプールの表現である。また 'judy' は女性全般を意味し、'kid' は何故か「弟」を意味する。「タレント」(talent) は「才能」や「芸能人」ではなく「美男美女」を意味する。人と別れるときには 'goodbye' よりも 'ta-ra' の方がリヴァプールの表現であり、相手が言ったことを聞き返すときにも



リヴァー・クロック：リヴァプールのランドマークのひとつ



パディのテント小屋、またはマーズイー川の漏斗

'sorry?' とか 'I beg your pardon?' よりも 'yer wha?' がよい。礼を言うときに 'thank you' の代わりに 'ta' と言うのはイングランド南部やウェイルズでよく耳にするが、これもリヴァプールでも使われる。

つなぎの言葉として文頭、文中、文尾を問わず頻出する（標準英語の 'you know' に相当する）間投詞として 'like' というのがある。ただし、これも必ずしもリヴァプール方言に限った用法ではない。夏目漱石の『坊っちゃん』の英訳版（アラン・ターナー訳）では、語尾の「ぞなもし」をこの 'like' で表現していた。

ギリシア・ローマ神話と現代 (2) 新惑星エリスの名前の由来

経営学部
山田 晶子

惑星の名前には、ギリシア・ローマ神話から取られたものがある。今年の9月13日に、国際天文学連合 (IAU) が命名した新惑星「2003UB313」の名前「エリス」もそうである。エリスが惑星に昇格したために、以前は惑星であったがエリスよりも小型のために矮惑星に降格された冥王星「プルートー」の名前もギリシア・ローマ神話に由来がある。また、火星「マース」、水星「マーキュリー」、木星「ジュピター」、金星「ヴィーナス」、土星「サターン」の名前も、全てギリシア・ローマ神話から来ている。この他、太陽や月、様々な星の名前もギリシア・ローマ神話から取られているが、今回は、新惑星「エリス」の名前の由来とそれに関わる話を書こうと思う。

「エリス」は女神の名前である。しかし「女神」

という神々しい言葉から受ける印象に反して、「エリス」は不吉な名前なのである。女神には美や優しさや勇気や愛という心地よい響きと関係する神々だけではなくて、復讐や不和等の怖い性質を備えた神々が含まれているのである。そしてエリスという女神は「不和」を司る女神なのである。「エリス」はギリシア名で、ラテン名はディスコルディア (Discordia) であり、英語 "discord"（「不和」「仲たがひ」の意味）の源になった語である。エリスは、ギリシア・ローマ神話の中では目だっていない女神であると考えられるが、あの有名なトロイ戦争を引き起こした陰の張本人であることを考えれば、表立って目立っていなくても重要な存在なのだと分かる。

では、トロイ戦争はいかにして勃発したのだろうか。19世紀に、ドイツ人シュリーマンがトロイの遺跡を発見して以来、ギリシア人ホメロス作の『イーリアス』と『オデュッセイア』に登場しているトロイという国は、実在していた国であることが分かっている、現在の小アジア（トルコ）に位置していたと思われる。トロイの国には美貌で有名な王子パリスがいた。彼の兄がヘクターであった。

さて、不和の女神エリスは、ジュピター（ギリシア名ゼウス）の愛人テティスとペレウスの結婚式に招待されなかったことに腹を立てていた。招待されなかったのは彼女が「不和」をもたらす女神であったからやむを得なかったと言えよう。しかし、エリスは何となく自分の不名誉の仕返しをしたいと思っていて、オリンポスで結婚式が盛大に行われていた際に、黄金のりんごを投げ込んだ。そのりんごには「一番美しい者がこれを手に入れることができる」と書かれていた。これを見て、ジュピターの正妻であるジュノーと女神ヴィーナス、そして女神アテナ（ミネルヴァ）の三人が、自分こそが一番美しいからりんごを手に入れる、と全世界で最高の美女の称号を得ようとして立候補した。三人のうちで誰が一番美しいかを審判する役割を当てられたのが、トロイの国のパリス王子であった。三人の女神は、パリスに、もし自分